

經濟論叢

第124卷 第1・2号

フランスの貴族商業論のひとつま(下)……………	木 崎 喜 代 治	1
Currency Board System 生成の論理, 1893-1917年(下)……………	本 山 美 彦	25
マルクスの欲望論……………	神 谷 明	46
「科学的管理」批判と効率・人格・民主主義……………	陶 山 計 介	68
資金問題と利潤率決定……………	山 下 清	87

經濟学会記事

昭和54年7・8月

京都大學經濟學會

II 日本の企業の財務行動について

イラリ・トゥルニ教授 (フィンランド・タムペレ大学)

(通訳 京都大学教授 山田 浩之)

(報告要旨)

日本の企業の財務面における最も重要な特徴は負債比率の高いことであるが、これはいかなる事情によって成立しているのであろうか。一般に、負債比率が高ければ、破産の危険も大きくなるが、日本の場合、小企業を除けば、破産率も低い。これはなぜであろうか。こういった問題について、日本を代表する企業を製造業より19社えらび、実証的に分析しようというのが、トゥルニ教授の課題である。

まず、日本の企業の財務環境に関する主要な特徴として、1) 高貯蓄率、2) 都市銀行の資金供給者としての役割が大きいこと、3) 都市銀行のオーバーローン、4) 日本銀行による信用統制の独自の方法、5) 銀行と企業との親密な関係、6) 企業間信用の相対的に大きな比重、等があげられた。

次いで、この20年間にわたる対象企業の財務指標の主な動向、たとえば負債比率の上昇傾向等についてふれた後、総資本収益率 o 、利子率 i 、負債比率 b と税引後自己資本利益率 r^* との間に成立する次の関係式 (α は税率にあたる)

$$r^* = \alpha[o + (o - i)b]$$

を用いて、重要な例となる企業について具体的に分析が行われた。そして、高い負債比率をもつ企業は概して、総資本収益率が低いのに對して利子率は高く、したがって $o-i$ が低くなること、これに對して負債比率の低い企業は概して総資本収益率が高いのに對して利子率は低く、したがって $o-i$ が高くなるという事実が指摘された。

次に、企業成長とその財務政策との關係について、とくに負債政策、内部留保政策の企業の成長に及ぼす効果に関して、次のような興味深いファクト・ファインディングスが報告された。すなわち負債比率の高い企業の方が低い企業よりも成長率が低くなる傾向があること、そして負債比率の低い企業は概して収益率が高いが、その場合内部留保率を高めることによって成長率を高めてきたこと、これに對して収益率の低い企業は負債のデコ効果を通じて成長率を高めようとしたこと等である。

なお、イラリ・トゥルニ (Ilari Tyrni) 教授はフィンランド・タムペレ大学、経済学教授であり、国際交流基金の招きにより、京都大学招へい教授として本学部において本年1月はじめより6月末まで滞在・研究された。上の報告はその研究成果の一部である。

(山田浩之)

外国出張

前川 嘉一 教授・浅沼 万里 助教授 [帰国留学生及び留学希望者の調査]

昭和54年2月7日より昭和54年3月1日まで タイ国、インドネシア国、シンガポール国、マレーシア国、フィリピン国

渡辺 尚 助教授 [日独経営史会議に出席]

昭和54年3月18日より昭和54年5月2日まで ドイツ連邦共和国

菊池 光造 助教授 [イギリス自動車、鉄鋼産業の工場レベルにおける労使關係の実態調査]

昭和54年4月7日より昭和54年8月5日まで 連合王国

木原 正雄 教授 [エネルギー問題の研究]

昭和54年5月15日より昭和54年6月24日まで ソビエト連邦、ドイツ民主共和国、オーストリア、スイス、フランス、オランダ、デンマーク